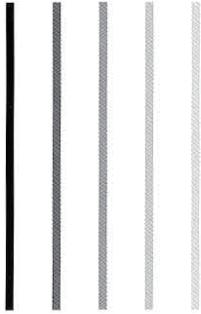
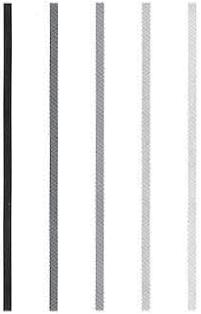
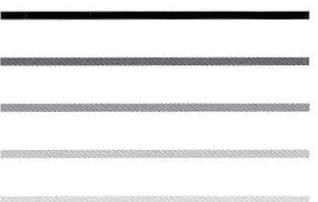
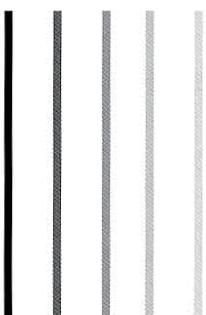
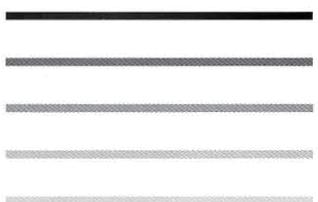


## 第34回 京都デザイン会議



# 活用都力の 京都デザイナーの未来

DIALOGUE 2014



京都デザイン関連団体協議会

## ごあいさつ

### 第34回 京都デザイン会議 会議録発刊にあたって

私たち「京都デザイン関連団体協議会」は1980年京都で活躍するデザインジャンルの9団体が集まり、デザインをテーマに話し合う場を設けるため結成されました。そして年に一度、デザインを切り口としたテーマを挙げ、その先端を担う内外の専門家をはじめ一般市民が気軽に参加でき、意見交換できる会議を企画し開催してまいりました。

34回目になる今回の会議は、長きに亘り議長として協議会を牽引していただいている三輪泰司先生に、「和の文化の継承」と題した基調講演をして頂きました。続いて参加7団体代表が現況を報告、そして「京都力の活用に向けて」をテーマにパネルディスカッションをして頂きました。

会議後の交流懇親会ではアトラクションと美味しい食事を楽しみながら、今後の交流活動にも繋げる貴重な時間となりました。

会議録にお目通しいただき、今後の活動へ一層のご理解とご協力を願い申し上げます。

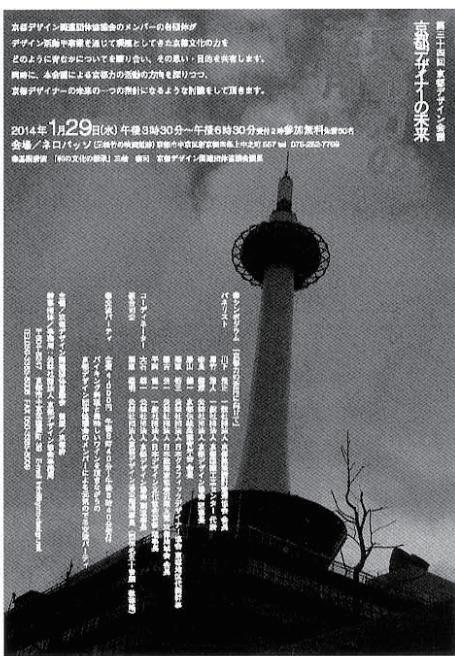
京都デザイン関連団体協議会 副議長

公益社団法人 京都デザイン協会 理事長 奈良 磐雄



第三十四回 京都デザイン会議  
京都デザイナーの未来

# 京都力の活用



京都デザイン関連団体協議会のメンバーが  
デザイン活動や事業を通じて課題としてきた京都文化の力を  
どのように育むかについてを語り合い、その思い・目的を共有します。  
同時に、本会議による京都力の活動の方針を探りつつ、  
京都デザイナーの未来の一つの指針になるような討議をして頂きます。

●日時：2014年1月29日（水）  
午後3時30分～午後6時30分

●会場：ネロパッソ  
京都市中京区新京極四条上ル中之町557

●基調講演

「和の文化の継承」三輪泰司 京都デザイン関連団体協議会 議長

●シンポジウム

「京都力の活用に向けて」

パネリスト：  
川下晃正 一般社団法人 京都建築設計監理協会 会長  
黒竹節人 一般社団法人 京都国際工芸センター 代表  
奈良磐雄 公益社団法人 京都デザイン協会 理事長  
勝山龍一 京都伝統産業青年会 会長  
藤原裕三 公益社団法人 日本グラフィックデザイナー協会京都地区 代表幹事  
國吉公一 公益社団法人 日本建築家協会近畿支部京都地域会 会長  
平岡隆一 一般社団法人 日本デザイン文化協会京都 理事長  
コーディネーター：大石義一 公益社団法人 京都デザイン協会 副理事長  
総合司会：藤原義明 公益社団法人 京都デザイン協会 副理事長

●主催：京都デザイン関連団体協議会 ●後援：京都府

幹事団体／事務局 公益社団法人 京都デザイン協会事務局 〒604-8247 京都市中京区塩屋町39

# 和の文化 の継承

基調講演

「和の文化の継承」

“京都デザイナーの未来”への問題提起

- A. 京デ協の生い立ちとやってきたこと
- B. デザインの本質と役割
- C. ユネスコ憲章と世界文化遺産
- D. 「和」の文化的特質と京都デザイナーの責務

：三輪泰司 京都デザイン関連団体協議会議長

藤原（司会） 本日の司会を務めます京都デザイン協会の藤原と申します。よろしくお願ひいたします。今日は今年最初の会合ということで新年会を兼ねて、すばらしい会場をお借りすることができました。のちほどパネリストとして紹介させていただきます、くろちくグループの黒竹社長にご提供いただきました。ありがとうございます。ここは元松竹の映画館で、それをこのようなスポーツバーに改装された施設です。ふだんは若い方々でおおいに盛り上がっていると伺っておりますこの場所で、今年は京都デザイン会議を開催させていただきます。第2部にはバンド演奏なども用意しております。どうぞ最後までごゆっくりお過ごしいただければと思います。

それでは、ただ今より第34回京都デザイン会議を開催いたします。初めに基調講演を、本日の主催団体であります京都デザイン関連団体協議会の議長、三輪泰司先生にお願いしたいと思います。三輪先生よろしくお願ひいたします。

## ◎基調講演「和の文化の継承」

皆さんこんにちは。京都デザイン関連団体協議会、通称「京デ協」の三輪でございます。それでは基調講演としまして、小一時間ほどお時間をいただきます。

本日の主題は、この後、引き続き「京都デザイナーの未来」というシンポジウムが行われますので、そのための問題提起としてA、B、C、Dという4つの項目で話を進めていきます。



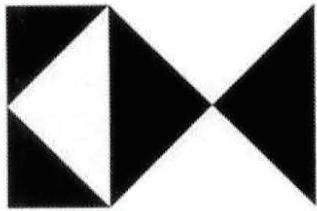
三輪泰司 京都デザイン関連団体協議会議長

## A. 京デ協の生い立ちとやってきたこと

最初に、そもそも京都デザイン関連団体協議会（京デ協）とは何か。その生い立ちとやってきたことを振り返ります。

### 1967～1980

この団体には前身がありまして、1967年（昭和42）に京都デザイン協議会という団体が設立されました。初代理事長は林大功先生です。この時代はデザインといいましてもまだジャンルが未分化で、この団体には個人も団体も全部が参加するというかたちで誕生しました。京都デザイン協議会（KDC）のマークはこのようなものでした。



京都デザイン協議会（KDC）のマーク

1977年（昭和52）、KDC設立10年目に「京都デザイン会議」、今日のこの会議の第1回ですが、それを初開催いたしました。この時のスローガンは「21世紀への新しい波を京都から」という勇ましいものでした。

1979年（昭和54）、京都デザイン協議会（KDC）は京都デザイン協会と名前を改めました。この頃にはデザイン・ジャンル別にいろんな団体ができました。京都デザイン協会と改称したのですが、この時点では建築の富家先生らもまだ京都デザイン協会に所属しておられました。この時の理事長は西脇友一先生でした。

1980年（昭和55）、京都デザイン関連団体協議会（京デ協）を結成しました。前年に京都デザイン協議会が京都デザイン協会となり、他にもいろんなジャンル別の団体ができておりましたので、それが集まって連合体をつくった。これが京都デザイン関連団体協議会（京デ協）で、柴田寛一先生が初代会長でした。この時のスローガンは「平安建都1200年を目指して」。「京都デザイン会議」第7回から、この京デ協が主催して行うという今日のかたちができました。当初はデザイン関連9団体から始まった協議会ですが、設立した時には12団体に増えしておりました。

### 1994＝平安建都1200年

1994年（平成6）、いよいよ平安建都1200年の記念年に入ったわけですが、この年は2回デザイン会議をやっております。第14回の定例「京都デザイン会議」を春3月に開催しました。この時はアカデミック・シンポジウムと称して、ちょっと趣の変わったことを行いま

The poster features a large oval at the top containing the text "第14回京都デザイン会議 アカデミック・シンポジウム 開催のご案内". Below the oval is a question in Japanese: "[人類はどこへむかっているのか] ーいまデザインを考えるー". There is a block of Japanese text explaining the theme. At the bottom, there are four small portraits of speakers with their names below them: 塙原和郎 (Plenary Speaker), 中川久宝 (Plenary Speaker), 小林久之 (Plenary Speaker), and 小林泰日 (Plenary Speaker).

第14回京都デザイン会議 アカデミック・シンポジウムでした。「人類はどこへむかっているのか——いまデザインを考える——」というテーマで、大きく宇宙の時空から、人類の誕生から、日本人の成り立ちから考えていく。デザイン・ジャンルの展開を見据えて、デザインの根源を探ろうとしたのです。国際日本文化研究センター名誉教授の埴原和郎先生には日本人の起源を、宇宙科学研究所の平林久先生は宇宙はまだ広がっていると、京都大学教授の中川久宝先生はフランス文学がご専門ですが、西洋史と日本史の両方から、西洋ではデザインは神の世界計画である、というようなアカデミック・シンポ

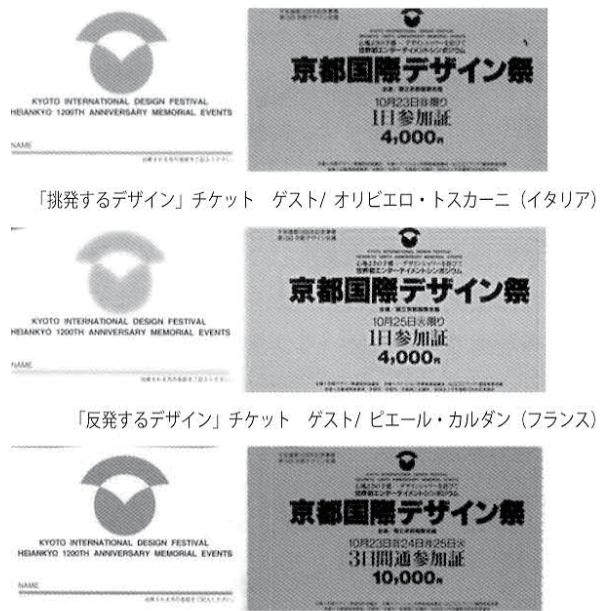


京都国際デザイン祭ポスター/ デザイン石井竜也

ジウムを行いました。

11月には、京都国際デザイン祭を開催しました。エンターテイメント・シンポジウムと称して、「心地よさの予感——デザインシャワーを浴びて——」と題し、ボスターは石井竜也さんにデザインしていただきました。メインゲストにはスティーブン・スピルバーグを予定し、実際に彼からOKもいただきました。ただ映画『ET』が大ヒットした頃で、アカデミー賞にノミネートされており、それとバッティングしたらアウトだと。彼は大勢のスタッフを連れて自家用ジェット機で来ますので、ジェット機をどこに着けたらいいのかと悩んだりしましたが、残念ながらアカデミー賞受賞で京都にお招きすることはできませんでした。

こうして世界からゲストをお迎えし、共に刺激を倫しみ、京都の魅力をシャワーのように浴びようというこの催しは、3日間に亘って行いました。これがその時のチケットです。



1日目は「挑発するデザイン」として、イタリアからオリビエロ・トスカーニ、当時ベネットでおもしろい斬新なデザインをやっていたデザイナーです。2日目は「反発するデザイン」としてフランスからピエール・カルダンを。3日目は「爆発するデザイン」として、アメリカからACC（アートセンターカレッジ・オブ・デザイン）学長のデビッド・ブラウンをお呼びして、華々しく開催いたしました。

事業および団体として学んだことということで「平安建都1200年を目指して」の目標は達成しました。デザインを根源から考え、デザインを広く世界から見聞き、日本や京都の特性が見えた、すなわち理念・内容では成功

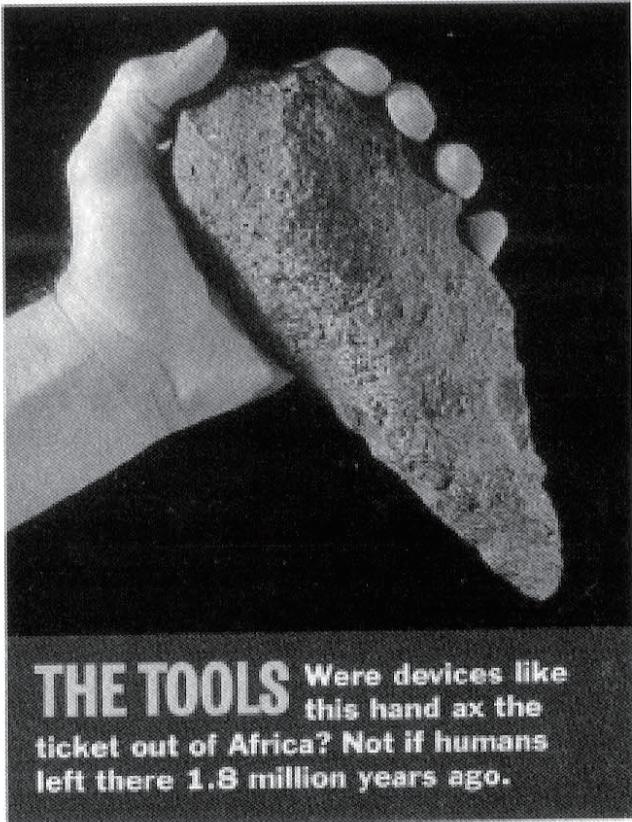
しました。ところが、事業や興行面から見ると失敗でした。デザイナー主導で企画を実行したのですが、情勢分析としては、ちょうどバブルが崩壊し景気が下がり始めた頃で、行政からも金融機関からも補助金や助成金が減ってしまった。次に客層把握、3日間で1200人の来場があったのですが、それぞれテーマが違うので毎回客層がガラリと入れ替わってしまい、3日間連続の意味が薄らいた。その点は広報の仕方にも課題があったかと思います。そういうわけで、財政的に見ますと予算4000万円の事業というのはデザイン会議としては桁違いに大きかったのですが、結果としては大赤字。ただ関係者にはきちんとお支払いするものはお支払いし、迷惑をかけないという処理は行うことができました。

以上が京都国際デザイン祭の反省でありました。では京デ協を反省してみると、性格とか組織とか財務規定が当時は極めてあいまいでございまして、議長はいても副議長、事務局長がまだ置かれていなかった、財政的にもいろんな取り決めができていなかった。そこにはデザイナーという人間の生態とか意識が反映しているのだと思いました。われわれデザイナーは自由ではあるが、この世界にも責任というものが発生するのだということをひしひしと感じたわけでございます。そこからわかったのは、デザインの事業所にしろ個人にしろ財務基盤が弱い、中小零細企業であると。そのためにはデザインフィーをしっかりと確立すべきなのですが、自らフィーとマージンを混同しているようなところもあって、その辺に財務基盤の弱さがある、これを脱却しないとだめではないかということを痛感しました。

そこで次に、協議会・団体の責務とは何かとなるわけですが、まずは常に繰り返し繰り返し本質を問う必要があると思います。日本の、京都の文化的特性とは何か。そのためにはデザイナーの置かれている位置を知る必要があります。また求められるスキルアップに努力する必要があります。

それと、先ほど申しました通り、ビジネスとしての基盤を整える必要がある。世のために役立つ組織は社会的存在となるわけで、そのためには職能倫理を高め、社会的責任を果たす必要がある。それから財務・労務・法務の専門家と協働することも必要だということを実感いたしました。

## B. デザインの本質と役割



そこで、デザインの本質とは何か、という2番目の項目に入ります。

デザインというのは、先ほどのアカデミック・シンポジウムでもふれましたが、ホモサピエンスが人間になった瞬間から、生まれたといえます。たとえば写真にあります石器時代の道具。まず初めは握りやすく、次に使いやすく、そしてかっこよく進化していく。このようにデザインは素材や機能と結びつき、そして技術によって進化していくものだといえます。

次に、科学と技術の進歩と、デザインを見ていきます。デザインとテクノロジーは手を携えてインダストリー、プロダクトを支え、社会進歩に貢献するものであります。大型客船、コンコルドジェット機、大規模ダム、工作機械、自動券売機、ロボット、あらゆるところにデザインは広がっています。

ところがデザインは、殺戮にも組むということを考えておかないといけない。昨年末に亡くなった自動小銃設計者のカラシニコフ。彼のデザインはなかなかおもしろいし、機能的にもすごいわけです。

次は、デザイン概念の展開について。テクノロジーのジャンルとデザインのジャンルとはつながっています。人間が生まれて一番最初に感じるのは何か。ひとつは恐怖、もうひとつは喜び。初めてこの世に生まれ出て、オギヤーと声を上げるのはそのためでしょう。そんな人間

は、生まれた瞬間からデザインを必要としています。人間はひとりでは生きられない、人間が複数になった途端に必要となるのがコミュニケーション。それが広がり広がって、いまやものすごいコミュニケーションデザインに囲まれています。

次は、プロダクト・テクノ・デザイン、これは人間の力を拡張する方向のデザインです。人間の腕や脚の能力をどんどん拡張させた結果、道路、機械、さらにはコンビネートにいたるまで広がって行きます。

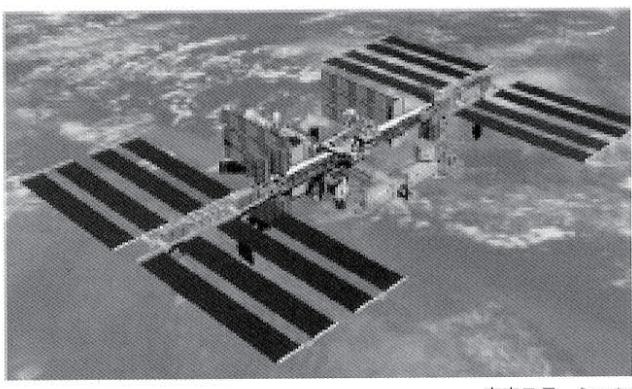
次は、エンバイロメンタル・テクノ・デザイン。これは全く違う方向で、人間と外部環境との関係。つまり衣服、建物、果ては宇宙スペースにまで広がっていきます。

次は、サーバイブ・テクノ・デザイン。これは人間自身の生存に関わる食のデザイン、眠るためのデザインなど。

というように、人間を取り囲むデザイン・ジャンルがどんどん広がっていくにつれ、京デ協でも団体のジャンルが広がっておりますが、異なるジャンルを知り、技術・素材を学ぶということが生まれてくるわけです。

ここでデザインの定義をしておきます。細かく分けたらたいへんですが、結局は、デザインは芸術と技術の間であるといえます。定義や概念規定をしっかりさせるのは辞典、百科事典の類ですので、お手許の資料にオックスフォード英語辞典ほか、いくつかを引用しております。先ほどもいいましたように「中世キリスト教ではデザインは神の世界計画」であり、その領域に人間が踏み込むのはおこがましいことである、などと考えられていた時代もあったわけです。

たとえば、エンバイロメンタル・テクノ・デザインの例を見ますと、衣服、シェルター、住居から宇宙ステーションまで広がっています。宇宙ステーションをデザインするのもデザイナーの仕事でありまして、現実にやっているデザイナーがいるわけです。そのように、デザインは機能に加え、風土に合わせて進化する。そして同じジャンルでも規模や技術が展開し、コストやフィーは当然異なるてくるわけです。



宇宙ステーション

## C. ユネスコ憲章と世界文化遺産

3つめの項目はちょっと角度を変えまして、ユネスコ憲章と世界文化遺産についてです。これはユネスコの旗です。



ユネスコの旗

昨年 2013 年は、京都で世界文化自由都市宣言が発せられて 35 年目の年でしたが、この 2013 年は日本と京都にとって画期的な年となりました。世界の歴史の確かに流れが「和」の方向へ向いているということがいえます。平和の「和」、和風の「和」です。

ご存じの通り、富士山が世界文化遺産に登録決定いたしました。これは『ミシュランガイド・ジャポン』2013 年版の表紙です。残念ながらミシュランガイドの 27 版には日本語版はないのですが、ご覧のように表紙写真を飾るのは富士山とシンカンセン。この 2 つはまさにグローバルブランドになっています。



世界文化遺産に登録された富士山

「和食文化」が無形文化遺産に登録されました。京都の産業文化と学術文化は併せて観光文化へ向かうと思いますが、そのエポックになりました。これでもって、ビジネスというのはあとからついてくるものです。

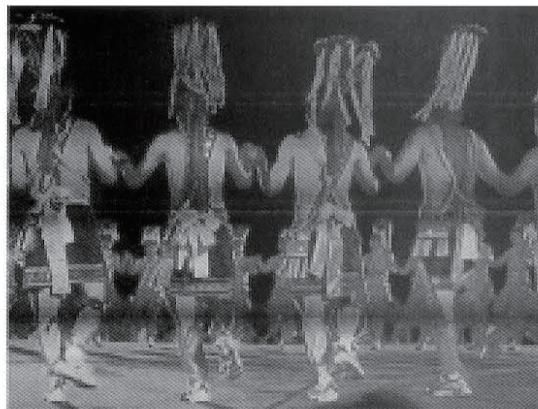
ここで、ユネスコ憲章を改めて確認してみる必要があると思います。参考資料として、ユネスコ憲章の前文と第一条の原文および日本語訳を添付しております。原文の英文はなかなかの名文です。要するにユネスコ憲章は何を言っているかというと、ひとつは、疑惑とか不信、無知とか偏見、これが平和を脅かす基であると。感情に溺れるということですね。このユネスコ憲章の精神を、われわれのジャンルに置き換えてみると、それぞれの

ジャンルの使命や悩みをよく知ること。今日はこの後のシンポジウムでそれぞれジャンルの違う皆さん方にディスカッションしていただきますが、そのジャンルの違うところで、いま何をやっているとか、どんなことで悩んでいるのかをよく知ること。

次にユネスコ精神は、無知と偏見を排し、尊厳・平等を認めあうこと。これをわれわれのジャンルでいえば、ベテランも若者も分け隔てなく話し合うことが必要だということです。

次にユネスコ精神は、知的精神的連帯のために努めること。われわれでいえば、ジャンルの特性や作法を教育・継承すること、このように言い換えられると思います。

「文化には場所による優劣はない」のです。これは梅棹忠夫先生もパプアニューギニアやアフリカを調査され言っておられましたが、それぞれの場所や民族によって、文化に優劣というものは絶対にない。写真で見ていただきます。雲南省パイ族の金花ちゃん。金花ちゃんとは未婚の女性のことをさします。美しいデザインです。こちらは台湾の阿見族の踊り。昔は首狩り族として名を馳せた民族ですが、よく見るとすばらしい衣装です。つまり、そこで条件に応じて最高に達しているということを認めなければならない。



台湾アミ族の踊り

文化にはもうひとつ、時間的な尺度で「時代による優劣もない」のです。これは敦煌の壁画、もうひとつは吉野ヶ里の櫓です。これもよく見ると技術、デザインともにすごいものです。その時代の技術では極致にまで達しているということを認めなければならない、ということです。

「文化には地域を超えた共通性がある」——たとえば沖縄竹富島の家、こちらは信州塩尻の家。雪国ではかえって屋根勾配がゆるやかです。勾配が急だと雪がドーンと落ちて危険です。一方、これは英國コッズウォルズの家ですが、それぞれの土地の素材を活かし、その風土に合わせて美しく心地よくつくるという点では、地域を超えて、完全に共通しているといえます。

## D. 「和」の文化的特質と京都デザイナーの責務

では最後の4項目めに入ります。和の文化的特質と京都デザイナーの責務とは何か。この後に京都力を議論していただきますので期待しておりますが、その前に京都力とは何かを探ってみましょう。

一般にいわれるのは、

- \* 日本列島の風土・四季、山河襟帶・山紫水明の京都
- \* 軽快・簡素・優美そして洗練の京都
- \* 外からの文化を吸収し、同化していく京都
- \* 先端と伝統、躍動と平穏、コントラストの京都

これらがよくいわれているところです。ハードとソフト、モノと知恵、これらが互いに感應しあって、つながっているのが京都の特性だといえます。その中にあってホンモノとマガイモノを見分ける目を養っていくことがわれわれには大事なことであろうと思います。

京都の特性でもうひとつ、文化が重層的に積み重なっていることです。この表は横軸が年代、縦軸が人口を推定したもの。中ほどの応仁の乱で人口が凹んで、明治以降はうなぎ昇りです。農耕文化に始まり、平安の王朝文化、中世の宗教文化、近世の産業文化、明治以降を学術文化、では次の時代は何か？ 私は観光文化ではないかと思っております。初めは東アジア、次にヨーロッパ、そしてアメリカから、文化をどんどん吸収して生き。それぞれの文化は芽ばえの端緒期から成熟に至るまで、概ね400年ずつ要していることがわかります。その400年ごとが互いにオーバーラップしながら今日に続いている。前の文化が失われるのではなく、その上その上に重層的に積み重なってきたことが重要なところです。



## 和の文化的特質とはなにか

いま和食文化が世界から注目されていますが、それはどう評価されているのか。「『和食』そのものではなく、自然を尊ぶ日本人の気質に基づく『食』にまつわる習わしを評価」する。とユネスコは言っております。具体的には

- \* 多様で新鮮な食材と素材の味わい
- \* バランスがよく、健康的な食生活
- \* 自然の美しさの表現
- \* 年中行事との関わり

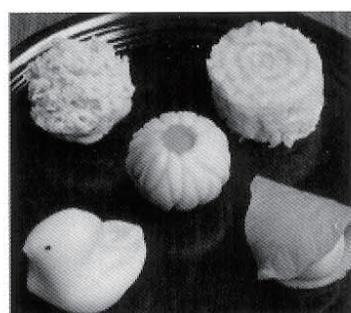
です。和食文化の作法を見てみます。写真は柊家さん、菊乃井さん、泉仙さん、いずれもミシュラン一つ星以上の和食を見ていただくと、先ほどの4つの評価がすべて、見事に満たされていることがわかります。



次は和菓子です。これも色、形、銘、です。衣食住、すべて自然の恵みをいただいているといえます。

建築の方から見ましても、自然の素材、とくに木を巧みに使うのが和の文化の特質といえます。これは甲州の猿橋。はね橋ともいって、両方からせり出してきて、猿が次々と背中に手を架けて橋にする知恵を見てつくったといわれております。平安京の豊楽殿の斗供にすでにこの技術が使われています。自然界を観ることで技術が美を、美が技術を触発する好例といえます。

洗練させる匠の技。これは京都にはいっぱいあります。さらに道具たちに敬意を払い、大切にしていること。これも大事な特質であろうと思います。



## 京都デザイナーの責務

おわりに京都デザイナーの責務を考えてみます。まずデザイン団体として何をやるべきか。ここにあげたのはKDA京都デザイン賞(2013)と、京都景観問題が出たときにつくったKS K建築デザインガイド(2006)です。デザイナーに機会を提供し、讃え、教育していくことが大事な責務だと思います。



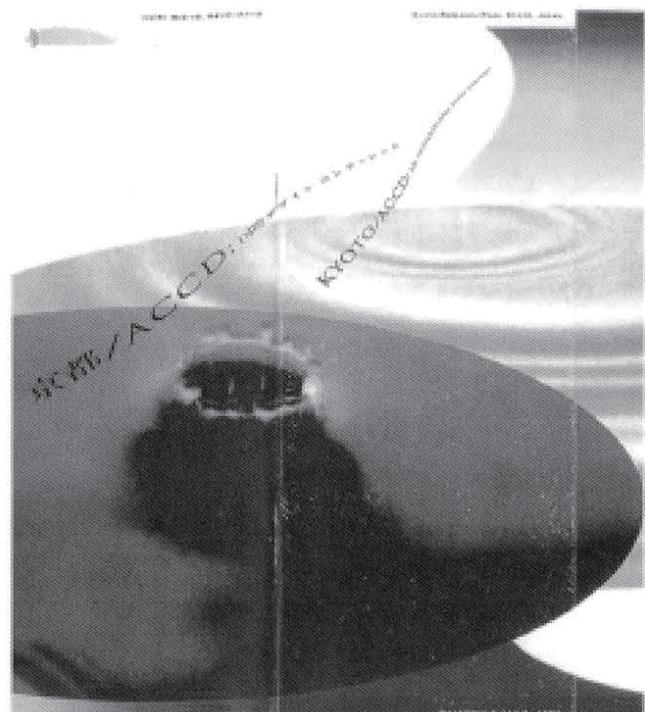
京都デザイン賞 2013 のポスター

次は京デ協という、デザイン団体連合体がやるべきことは何か。これは本日この場もそうですが、公共の支援を受けてデザイン会議を開催していく。国際会議としては、1993年に京都・ACCD国際コンファレンスを開催しました。ACCDは1994年国際デザイン祭でも招聘したカリフォルニアにあるデザインスクールで、カードデザイン、プロダクトデザイン、映画に強い。彼らから日本や京都を見ていただいて、京都型のプロダクトデザインはどうあるべきかを考えました。この時のポスター デザインはレベッカ・メンデスという女性です。彼女は映画『スターウォーズ』のキャラクターデザインをやってた方で、彼女にとってはポスター デザインのデビュー作でした。

次は、こうした活動の記録を整理して保存していく責任についてです。京都デザイン協会さんのオフィスは、まさにデザインライブラリーのようになっております、

これは大事なことです。科学は日々のデータを蓄積していくことによって進歩するわけです、その方法に学んで分析・評価し、整理することをわれわれも組織としてやっていく必要があると思います。

1999年には20世紀を総括する意味で、デザイン総括を京デ協が行いました。2002年にはダイアログというのをシリーズでやっておりました。こうした活動が「デ



京都・ACCD国際コンファレンス(1994年)のポスター/ デザイン: レベッカ・メンデス「デザインセンター」の中身であろうと思います。

もうひとつは、デザイナーの世界から枠を破って、公共団体や経済界とも連携することも責務です。平安遷都1200年前後には「平安京の創成」ということで、京都経済同友会が提言を出しています。また京都市は毎年、市の要覧を作成しています。こういうことも吸収していく必要があります。

さらには、国を超えて学び合う。写真は外国に向けて紹介する『関西の日本建築』。関西国際広報センターが出たツールです。もう一冊は韓国での『美の里づくりガイドライン』。これは国土交通省がつくったものを韓国政府が翻訳したもので、こうやってお互いに伝え合う努力が必要だろうと思います。

以上で、かなり急ぎ足ではありましたが終わらせていただきます。要約しますと、

- \* ビジネスとして強いデザイナーズファームをつくるう
- \* 京都の伝統的・文化的ストックを活かそう
- \* サイエンス・アーツでブラッシュアップしていくう
- \* 視野も行動もグローバルワイドにやっていくう
- ということになります。その根底にあるのは職能倫理

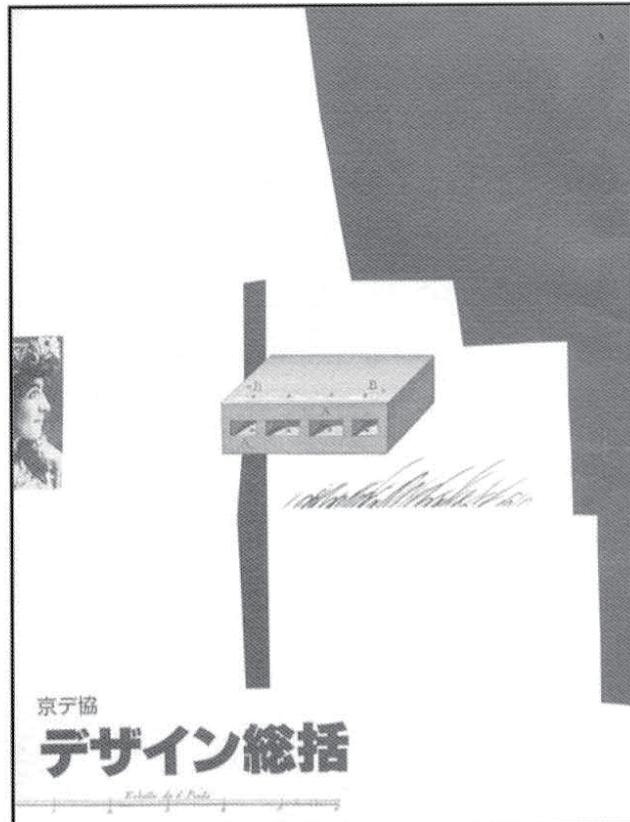
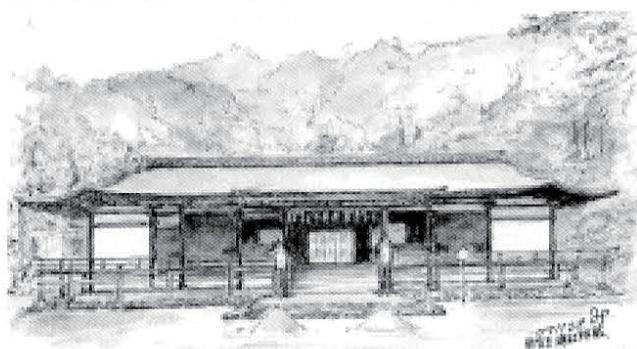
であろうと思います。ご静聴ありがとうございました。

藤原 ありがとうございました。三輪先生へのご質問などはいかがでしょうか。  
ないようでしたら時間もまだありますので、先生のほうから言い漏らされたことがあればお願ひします。



三輪 次のシンポジウムにたっぷりと時間をかけたいと思いまして、かなり急いでしまいました。京デ協という団体は、本来なら 1994 年の平安建都 1200 年をやり遂げたので任務は終わったともいえまして、その時点でやめようかという議論をしました。が、やっぱり続けようとなったわけです。というのは、この協議会がない昔は皆がバラバラでした。京デ協ができたことによって、お互い「こんなちは」と会いに行けるようになった。そして、こんな世界もあったのかと知ることができるようになった。ということで、存続の方向に舵を切ったのでございます。

しかし先ほども組織のことで申しました通り、協議会には解散規定がないのです。会費は団体からいただくのですが、それぞれがいくら出すという会費規定もない。組織規模の大小による規定がないとか強制徴収ができないとか、という状況でやめるにやめられない部分もありました。ですので、この組織を次はどうしていくのかと、いろんな議論がありました。結局いまのところは単一団体ではなく、協議体であるということです。強制力はないのですが、協議体として必要だろうというところが最大公約数、現在の状況であることをご報告いたします。



デザイン総括（1999 年）/ 京都デザイン関連団体協議会刊



「美の里づくりガイドライン」制作/ 国土交通省（翻訳：韓国政府）

# 京都力の の活用

シンポジューム

## 「京都力の活用に向けて」

川下晃正	一般社団法人 京都建築設計監理協会会長
黒竹節人	一般社団法人 京都国際工芸センター代表
奈良磐雄	公益社団法人 京都デザイン協会理事長
勝山龍一	京都伝統産業青年会 会長
藤原裕三	公益社団法人 日本グラフィックデザイナー 協会 京都地区 代表幹事
國吉公一	公益社団法人 日本建築家協会近畿支部 京都地域会 会長
平岡隆一	一般社団法人 日本デザイン文化協会京都 理事長

コーディネーター：大石義一

大石義一 公益社団法人 京都デザイン協会 副理事長

藤原（司会）

それでは、三輪議長の基調講演に続きまして「京都力の活用に向けて」のプログラムを進めてまいります。コーディネーターの大石さん、進行の程、よろしくお願ひ致します。



コーディネーター：大石義一／京都デザイン協会 副理事長

大石 京都デザイン協会の大石義一です。どうぞよろしくお願ひします。いま三輪議長からたいへん重い基調講演をいただきました。私の頭の中は、実は2週間前から今日のコーディネートをいろいろ思い悩んだり作戦を練ったりしておりましたが、議長の30年の流れや和の世界のお話など聴いて、いろんなものが凝縮されすぎていて頭がフラフラの状態です。

先ほどは京デ協、京都デザイン関連団体協議会が12団体に膨らんだというところで三輪議長のお話にありました。現在は3団体減って9団体ございます。今日は、そのうちの2団体は、今回すでに予定が入っていたりの諸事情があり、結果的には7団体に参加していただきました。各団体の皆さんには、昨年の暮れから今年初めにお願いしてお力添えをいただくことができまして、たいへん感謝しております。

これから、この7団体の代表の方とシンポジウムをいたしますが、各団体がどんなことをしておられるのか、各団体より自己紹介をしていただきます。それではまず京都建築設計監理協会会長の川下さんからお願ひします。

一般社団法人 京都建築設計監理協会 会長 川下晃正



京都建築設計監理協会会長の川下でございます。いま

講演をいただきました三輪先生は、私から二代前の会長を長いことやっていただきまして、そのあとを引き継いでやっております。

私どもの会は建築の設計監理という仕事を専業としている建築設計事務所の団体です。工務店でも一級建築士がおられて、一級建築士事務所登録をして設計をするという看板を掲げておられるところもあります。しかしわれわれは施工とは完全に別に、設計監理だけを行うという設計事務所の団体です。

われわれの理念は、先ほど言いましたように建築するにあたって、設計と施工は完全に分離するのが建築事務所のために良いと、そういう原則を第1に活動しております。2番目は、建築家の職能倫理を遵守すること。3番目に、美しい建築とまちづくりに貢献すること。以上が基本的な理念です。



セミナー開催と親睦会

活動の基本としては、設計組織の社会的地位の向上をはかるという活動を行っています。それから設計組織の活動基盤の向上をはかる、具体的には設計料をきちっといただけるようにする、あるいはその額を向上させるということと、役所はじめ建築主からの発注のしかたを正しくしていただくための活動。3つ目は、崇高かつ重要な使命を果たすためにわれわれ自身が豊かな見識と高い技術を持たなければならぬということで、これは会の活動で最も重要視しているところでございます。4つ目は、会員同士、およびメーカー・サブコンサルタントが賛助会員でおられますので、そういう方々と親睦を深める、この4つが活動の基本です。

具体的な活動を申しますと、技術研修活動として、技術講習会を年数回やっております。そのなかでも先進技術研究会を別に作って、ソーラーや自然エネルギー活用の学習会を立ちあげたり、京都に豊富な建築のストックを学ぶ見学会、会員が新しく設計監理した建物の見学会等々もやっています。また、三輪先生もおっしゃった経理面をきちっとしようということで、所内の運営とともに

経営的な活動についても会をつくっております。

そして次が親睦活動です。写真はセミナーの様子です。われわれの会の特徴はクソマジメに、新年会でも必ずセミナーをやってから行う。あるいは賛助会員を含めた親睦会をやるときも、必ずその前に技術的なセミナーをやるのを原則としております。今年の特徴としては、きょうの会議テーマにもつながりますが、セミナーでは京都で培われた伝統的な建築技術を学ぼうと、数寄屋建築、社寺修復などを主に、大学の先生をお招きしました。とくに数寄屋建築のセミナーは好評で、今年も続いて開催することになりそうです。



旅行を兼ねてものづくり現場見学会

これは見学会の様子です。私どもの会員は建築設計事務所の代表者である所長ですが、こういう見学会には所長だけでなく所員もたくさん参加します。これは年一回秋の研修旅行。私ども設計監理協会と建築家協同組合が合同で行い、主には賛助会員のご協力を得て工場見学をさせていただきます。ものづくりの現場を見ることは、ただ図面を描くだけでなく非常に勉強になります。

情報サロンは賛助会員を含めた飲み会です。この飲み会の前にもセミナーをやるのがわれわれでして、ここでは賛助会員の製品紹介や宣伝PRも可で、しかし必ず新しい技術を紹介してもらうセミナーをやってから、飲み会に入ります。

以上が私どもの主な活動でございます。どうぞよろしくお願いします。



秋期合同旅行会（ダイキン工場見学）

## 一般社団法人 京都国際工芸センター 代表 黒竹節人



一般社団法人京都国際工芸センターの代表をさせていただいております黒竹です。京都国際工芸センターは発足して30年、世界クラフト会議（WCC）が京都岡崎で開催された翌年に発足しました。初代会長は川島織物の川島春雄さん、二代目会長は傳來工房の橋本奈良二さん、そして三代目の理事長を私がさせていただいております。こうして発足から30年経ちまして、私は36歳の時から関わって今日を迎えてることになります。

では活動をご紹介させていただきます。私どもの工芸関係はライフスタイルの変化によって、工芸技術を生かしたいいろんな装飾的なものが消滅しつつあります。工芸の多くは家内工業的な工房が多いので、そういう力を離散せずに集めていくことを研究し取り組みをしております。とくに最近は手仕事に興味をもつ若い方がふえていますので、工芸界に若手を育てたい。ということで、私どもの会館は高倉三条下ル、京都文化博物館の通りにありますので、文化博物館で行われる工芸や絵画の展覧会で若手の方を対象とした博物館ツアーをしております。これは博物館の中を歩きながら、専門家の先生に作品の意味や技法を解説していただくというものです。

また、国際工芸センターと「国際」の名を冠するように、国際的な交流事業としては2012年に『インド更紗特別



京都国際工芸センタービル

交流展』を行いました。これは祇園祭の胴懸に使われているインド更紗と同じ文様でデザイン違いのものが海外でみつかった、その作品と交流の歴史を展示したものです。ここで興味深いのは、調べていくとインド更紗のなかに描かれている柄は狩野派の屏風絵を参考にしていることがわかつてきました。つまりインド更紗が日本の諸大名に献上された後、諸大名から狩野派の屏風がお返しに贈られた。その屏風の文様がインドの職人の手でタペストリーに染められ、再び日本の大名に渡ったものを後年、南觀音山が入手したとみられています。

今年はスペイン日本国交400年ということで、スペイ



インド更紗

ン各地で展覧会が行われます。昨年第一回の展覧会が行われ、そこに商品開発事業として私どもが制作している『誰が袖屏風』を出品しました。衣桁に400年ほど前の小袖を掛けた様を『誰が袖』と申します。『誰が袖屏風』の本物は美術館にありますが、400年も経つと絹が裂けてきています。それを小袖の染め、縫い、刺繍、経年性も忠実にレプリカとして制作し、日本の伝統的な屏風文様を現代の人たちに身近にしていただける新しいモデルにしようというものです。これはオーダーをいただいて制作します。ヨーロッパは白い壁ですので、この屏風は絵画的にも楽しんでいただけます。バルセロナの個人ギャラリーのオーナーに通訳の方が「これはスペインでいくらで売れますか」と聞くと、日本の価格の2.5倍から3倍程度のお値段を言われました。海外のある程度アートをご理解いただいている方々にとって、日本の工芸技術、染織、古美術もそうですが、非常に理解度が高いということを実感いたしました。ですのでIT、ハイテクのみならず、こういった工芸技術も海外に進出する機会をつくっていくことで、京都国際工芸センターの役割を果たしていきたいと考えております。

次は研究事業です。これは京都力という視点から、工芸の技術を建築に活かそうというもの。建築のなかでも

現在あるものをリフォームして、町並を保存しながら古い伝統的な景観を維持していくという事業です。そのなかで工芸の技術をもっと具体的に使っていただければと、そういう市場を開拓創造していくと考えております。

また教育事業として「工芸文化と検定事業」という事業にも取り組んでいます。近年さまざまな礼儀作法、しきたりが簡略化され、省略されています。なぜ工芸が衰退するのかを考えると、せっかく優れた技術があってもそれが利用されない、普及しない、という経済的な問題で絶える場合が大半です。たとえば結納が省略されると、水引の技術が継承されない。ということで、日本が伝統的に育んできた作法、神事、節句に関するものをもう一度見直すことで、技術を復活しようという考え方のもとに「にっぽん検定」という名前の検定事業をしております。

そうして京都力を活かすなかでそれぞれの取り組みをし、総合的にはグローバル化のなかで海外の人にも日本のよさ、きもの、伝統的な染織技術、これらを理解される方がふえておりますので、そういう広がりを持たていきたいと考えております。

#### 公益社団法人 京都デザイン協会 理事長 奈良磐雄



京都デザイン協会は2014年4月で47年目になります。先ほどの三輪先生の歴史的なふり返りのなかで、京都デザイン協会も当初からその一員として入らせていただいておりました。最初は日岡の先生方が主力を占めており、時代の流れとともに図案、染織関係から、高度経済成長にともない広告宣伝に携わるグラフィックデザイナー、映像関係がふえ、さらに状況が変わり、現在は建築関係の方がたくさん加わっておられます。

私どもは旧来の社団法人から、一般社団法人ではなく公益社団法人への移行を選びました。46年の歴史があるのですから、京都府の指導もいただきながら公益という高いハードルをクリアしようと頑張っています。



## 公益社団法人 京都デザイン協会

われわれの公益事業を代表するものに「京都デザイン賞」があります。この事業の大きな目的は、デザインを通して地域基盤の向上と地域産業の振興を推進するものです。当初は京都府の事業を受託するかたちで「デザインの優れた商品」を公募、選定し、それらを世に知らしめていくという事業を続けてきましたが、いったんストップして5年前に「京都デザイン賞」としてリスタートしています。

公益事業の2番目は「デザインアドバイス事業」。これは京都の中小企業、商店、あるいは個人の方とデザイナーをつなぐ接点をつくるというものです。

3番目は、黒竹さんの京都国際工芸センターとも関連深いのですが、「伝統工芸デザイン支援事業」。これは伝統工芸製品を現代生活で使えるものにしていくとする活動に、デザインの視点からアドバイスする事業です。

次に「研究・シンポジウム事業」は、われわれはデザインという職能で繋がっていますが、そのジャンルは多岐に亘りますので、幅のあるテーマを決め、研究・調査・発表を様々な方に参加して頂き活動しています。いま成果がまとまりかけているのが「三条通の研究」です。これは三条通の、東は四ノ宮から西は嵐山まで、ほぼ14kmをずっと調査したもので、すでに、数十ページにわたるレポートとしてまとめております。この成果は後日場所を変えて皆さんにご覧いただく予定です。

写真は京都市立芸大をお借りしての「京都デザイン賞2013」の審査風景です。一次審査はデザイン協会メンバーが行い、二次審査は外部の先生方にお願いして、グランプリほか各賞を決定します。次は京都府旧本館正庁で併設のデザイナー展。これは京都デザイン賞2013の表彰式の様子です。今年のグランプリは京都八百一さんの建築も含むビジネスそのものが評価されました。入選作品講評会も、この旧本館正庁でやり、場所を移し受賞者とデザイン協会会員、一般の方々も交えた交流会となります。



京都デザイン賞審査風景/ 京都市立芸術大学にて

これはデザインアドバイス事業の中で、授産施設選定商品「ぬくもり京都丹波」の展示販売用ショップディスプレーデザインをした具体例です。こちらは三条名店街における支援事業。まずは芸術系大学生とお店をつなぎ、お店ごとにゆるキャラをつくっていただき、商店街での人気投票で入選作を決める。商店街活性化と販売促進をお手伝いしようというものです。

次に、われわれデザイナーである会員のメリットになる共益事業があります。こちらは毎年、京の老舗の方々とコラボレーションによる会員展です。この作品展のタイトルは「おかしなわがし展」で、デザイナーがスケッチした和菓子のデザインを、「有職菓子御調進所老松」さんの職人さんの手でお菓子にしていただくというものです。和菓子は日持ちがしないので、写真による展示とし



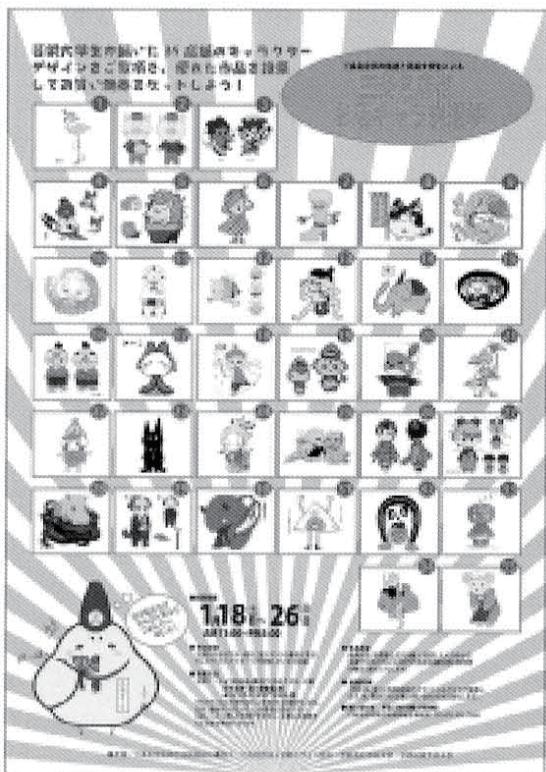
KDA会員展 / 「おかしなわがし展」

ました。又、秋田県の会員さんのご苦労で、秋田のギャラリーでも開催しました。

共益事業としてほかにも、会員相互の交流を目的とした交流会事業、K D A サロン、デザイナーズ・ミニカフェ、国際交流、それから今日ここで行われております京都のデザイナーによるデザイン会議も含まれます。

先ほどの三輪議長のお話と重なりますが、京都デザイン協会が京デ協の事務局をお預かりし、デザイン協会代々の理事長が京デ協副議長を務めさせていただいています。1994年（平成6年）の平安建都1200年・記念年の3月・第14回京都デザイン会議をやり終えて以降、われわれの独断で会議を開催することとなり、各団体の交流もだんだん希薄になってしまったことは、事務局として責任を感じております。もう一度振り出しに戻り、改めて交流が活性化することができればと思います。

これら年間を通じての事業は『LOOK! KDA』という協会機関誌で報告をしております。公益社団というお墨付きをいただいてスタートしたところですので、これからさらにネットワークを広げたい。そのためには人ととの関わりが何より大切と考えていますので、今後ともどうぞよろしくお願いします。



個店キャラクターコンテストポスター/ 主催: 京都三条名店街



ぬくもり京都丹波の展示販売用ショップディスプレー

## 京都伝統産業青年会 会長 勝山龍一



京都伝統産業青年会会長を務めさせていただいております勝山龍一と申します。京都伝統産業青年会、通称「伝青」と呼ばれていますが、この会は京都の伝統産業に従事するさまざまな職種の団体の、40歳から45歳までの青年部が集まる団体です。現在会員数は370名ほど。運営執行部は30数名くらいで運営をしております。

写真は昨年の総会の様子です。念珠、陶磁器、紋紙意匠、整糸、扇子、京人形、造園等々たくさんの職種・仕事がありますが、そもそも伝統産業とは何だろうと思われるでしょう。伝統工芸と伝統産業は微妙に違います。伝統産業とは「伝統的」「産業」という二つの言葉をくつつけた造語でして、たとえば庭師さんのようにものづくりない、庭をつくる方も伝統産業として位置づけています。また京つけもの、和菓子、日本酒、京料理、京野菜なども伝統産業として私たちは位置づけております。

活動の内容は、会員交流と伝統産業振興の二つの柱に分かれています。

写真は、毎年10月に開催されます京都文化祭典での活動です。「市民ふれあいステージ」という大きなステージの横で、僕ら京都伝統産業青年会、そして京都商工会議所青年部さん、京都JCさんが3ブースを出し、子どもたちにいろんな体験をしてもらっています。私どもは伝統産業の団体なので布をつくる体験、一昨年は機織り



H25年度総会

体験と、その奥ではやきものの体験。陶磁器の型に粘土を入れて置物をつくっていただきました。今年度は実際にろくろを使ってうつわをつくる体験と、投扇興、念珠づくりをさせていただきました。

本当に子どもたちが楽しそうにものづくりをしてくれるというのが、僕らのがんばれる気力になっておりまして、こういう体験事業をよく行っています。なぜ伝統産業の体験かといえば、ものづくりの楽しさ、つらさ、たいへんさを知ってもらうと同時に、自分たちがつくったものをどう使って、そして変化していくかということを感じていただくために、伝統産業振興の一環としてやっております。僕らの職種は日本文化の一端を担っているのですが、しかし実際には僕らがつくったものを使っていただいてこそ、それがじわじわと時間をかけて文化というのに育つのではないか、そういう考えのもとに活動しています。



市民ふれあいステージ/ 布づくり体験

もうひとつの活動である会員交流は、実は私たちの団体には欠かすことのできない核となっています。僕らは18団体、職種でいうと14から15あります。きもの、帯、私は帶地青年会に所属していますが、それらの糸関係は「糸へん」と呼んで、それだけでも複雑な仕事の種類に分かれます。他にも京仮具、竹材、表装などなど、他の職種のことを勉強する機会はふだん全くないので、この会でいろいろ話していると、自然に他の職種の知識が蓄えられます。そうして最終的に僕らが50、60代になってる頃にはいろんな分野を知ることができる。そうなって初めて伝統産業を担うリーダーとなれるんじゃないか。そういう意味で交流活動は僕らの大切な主軸となっております。

毎年11月には京都伝統産業青年会展を行います。会場は東山の青蓮院。紅葉ライトアップの時期に合わせて、若手が一同に集まっての作品展です。青蓮院さんの古い歴史的な建物とその場の雰囲気に、僕らのつくる伝統産業品が驚くほどよく合います。そのおかげで毎年好評を

いただいております。

伝青の会長は1年任期でだいたい2年務めます。私は現在会長2年目ですので、来年は新しい会長が新たな取り組みをいろいろと考え、また皆さんと手を携えて歩むことになります。きょう、ここで会議されます京都力を発揮して、伝統産業、京都の文化、日本の文化を発信するために、私たちも共通の課題と一緒に考えていきたいと思いますので今後ともよろしくお願ひいたします。

公益社団法人 日本グラフィックデザイナー協会

京都地区 代表幹事 藤原裕三



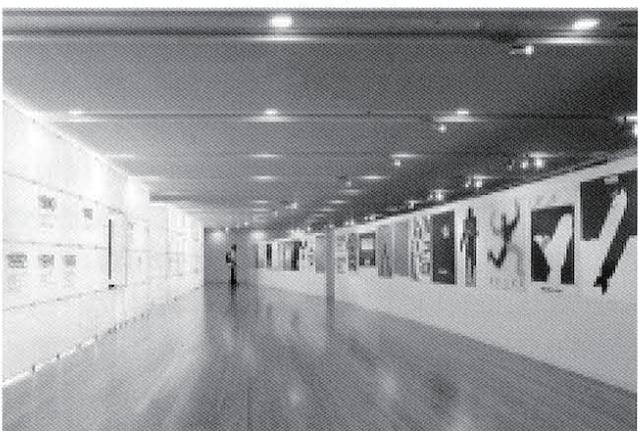
こんにちは。公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会です。昨年暮れにこの会議の連絡をいただき、恥ずかしい話そのとき初めてこういう団体に所属しているんだと知った次第です。過去の代表幹事に聞くと「ああ入ってるよ」ということで、私はまだよく認識できない状況ですが、私どもの協会を紹介させていただきます。

日本グラフィックデザイナー協会 (Japan Graphic Designers Association)、英字の頭文字をとってJAGDA (ジャグダ) と呼んでいただいております。設立は1978年。グラフィックデザイナーが中心となって、当時はまだ社会的にもそれほどグラフィックデザイナーが認識されていなかった状況で、グラフィックデザイナーの社会的な地位向上などを目的として設立された全国組織の団体です。全国10ブロック、さらに48地区に分かれています。私どもは関西ブロックの京都地区で、私は京都地区代表幹事の藤原と申します。よろしくお願ひします。

会員数は全国約3000名、他に賛助会員77企業で、京都地区は現在66名の会員です。会長は浅葉克己、副会長は佐藤卓・原研哉です。設立37年目、京都デザイン協会から約10年遅れのスタートですが、当初とはグラフィックデザインと呼ばれるものの領域がだいぶん変わっています。近年はウェブデザイナー、広告分野と一緒に仕事をしている方々ということでプランナー、コ

ピーライターもおられます。このような社会状況の変化を受けて、2010年より「JAGDA ヴィジョン」——グラフィックデザインの力を通じてコミュニケーション環境の質的向上に寄与する——のもとに事業を整備して全国的に行っていこうというのが現在のJAGDAです。

「デザインのいまを発信する」。年鑑『Graphic Design in Japan』を毎年発刊しています。会員が過去一年の作品を出品し、そのなかから優れた作品を選出して年鑑にまとめています。



JAGDA 全国巡回ポスター展

「デザインの未来を育成する」。ヴィジュアルデザインのJAGDA教科書を数年前に発刊しました。いろんな教育機関で副教材として使用いただいている。

「JAGDA ONE DAY SCHOOL」。全国の会員が地区事業として大学などを回り、デザインって今こんなことをしているよ、といったスクールを開催して学生との交流を広げています。

「デザインで日本を元気にする」。これは各地区各ブロックでの活動を活発化しようというもの。

「デザイナーをむすび、つなぐ」。全国大会を2年に1回、偶数年に全国各地で開催します。今年は広島大会に全国からデザイナーが集結。総会以外にもいろんな交流、開催地区主催の展覧会などで、作品も含めての交流を行います。

「ひろく社会へ向けてアピールをする」。いろんなテーマを設けての企画展開催です。また「やさしいハンカチ展」は、東日本大震災を受けて、東北の子どもたちが元気になる活動を支援しています。会員が参加費を持ち寄りハンカチを作成して今年で3年目。全国の展覧会でハンカチを販売し、その収益を義援金としています。

「国際ネットワークの起点になる」。これは国際的なデザイン活動に協力しようというものです。

「新たなデザインの発信拠点として」。事務局は東京六本木のミッドタウンにあります。そのフロア一画をデザ



JAGDA 全国大会

インハブとして、展覧会スペースやデザインの情報発信の拠点にしようという活動です。

「デザイナーを支援する」。これは会員にとって魅力となっている点です。著作権の問題、なかなか統一されない料金システム、健康保険などの福利厚生面のバックアップです。

それでは、ここからが京都の活動です。京都はまれに見るデザインを学ぶ学生の人口密度が高い都市だと思っています。それをふまえてたくさんある美術系大学を回りながら、「ONE DAY SCHOOL」や全国巡回ポスター展を行っております。京都独自の活動としては、丹後ちりめんを使ったアロハシャツ展、丹波ワインのメーカーさんと協同しての学生を巻き込んでのワインラベル展、会員によるぽち袋展などもあります。また関西ブロックでのお花見、お月見などの飲み会をホスト地区として担当する活動もあります。異分野のクリエイターといえる京の和菓子司さんに学び、交流する会などは、一般の方にもご参加いただける催しとしています。総合デザイナーズ協会（DAS）と合同の毎年のボジョレーヌーボー・ワインラベル展も、どなたでもご参加いただける飲み会として人気があります。「飲もう」がキーワードのようになってまいりましたが、これを機に皆さんにも広くご参加いただければと思いますし、また、そんなことなら会員に入ってもいいよという方がいらっしゃいましたらぜひお声かけください。この場で少し営業させていただきました。ということで、公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会京都地区のご紹介でした。今後ともよろしくお願ひいたします。



公益社団法人 日本建築家協会近畿支部 京都地域会

会長 國吉公一



皆さん、すごいですね。一人3分から5分と聞いていたのですが、やはりデザイナーの方々の達者ぶりに建築家はいつも押されていると感じました。

街にはたくさんの建築がありますから、今さら説明は必要ないかと思いますが、われわれはそういう建築物をつくる建築家の団体です。もともとの発足は明治時代ですが、戦後になって国交省の指示で建築家協会として社団法人になり、以来数十年続いてきましたが、昨年公益社団法人に改組されました。皆さんご存じの隈研吾さんや伊藤豊雄さんをはじめ、安藤忠雄さんは世界的な建築家なので入らないと言われていますが、現在約5000名の建築家の方々にご参加いただいています。北海道から沖縄まで10支部を中心に、各都道府県に地域会があります。京都の地域会には約100名が所属しています。

日本建築家協会はJIA (Japan Institute Architect) といいますが、世界的にはUIA (Union Internationale des Architectes) =国際建築家連合という団体があります。東日本大震災の年の2012年9月、UIA世界大会が東京フォーラムで開催されました。参加募集は6月終了の予定でしたが、その時点で参加者は予定の半分しかいませんでした。そこでわれわれも委員会として参加し「建築家の視点で東北の現状を世界に報告する。皆さんぜひとも日本にいらしてください」とアピールすると、8月には希望者が約3000名ほど増え、トータル5000名くらいの建築家が世界から東京に集まりました。大会終了後には参加者の半数くらいの方が東北に向かいました。世界の建築家にとって、東北の現実は非常にショッキングな出来事だったようです。私も「京都アピール」として、いろいろな文章を書かせていただきました。

今日はそういう話は別として、われわれの活動をご紹介させていただきます。

まず2011年に開催した「ARCHITECTURE & CHILDREN 建築と子供たち」というイベントです。これは米国のア



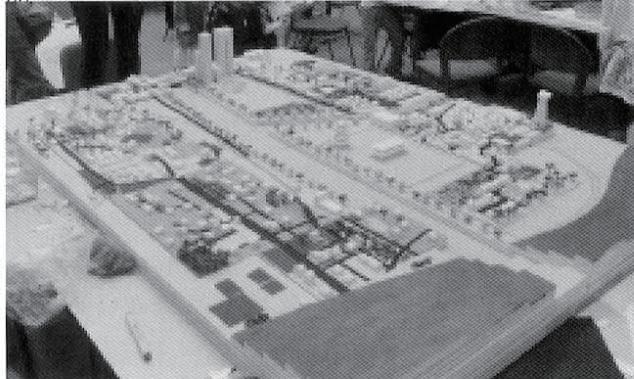
2011年開催イベント「建築と子供たち」

ン・テラーという建築家が提唱する活動で、建築を通して子どもたちへの教育や発想を考え直そうとする教育システムです。われわれの仲間を中心に行いましたが、建築を通した子どもたちへの教育を、世界との交流を交えながら始めました。

2年に1回、三条通の京都文化博物館で建築家作品展を開催しています。京都では高松伸さんや若林広幸さんをはじめ約30人の建築家が参加しています。具体的には、小学生と建築家が一緒になって、ワンデイあるいはツーデイで、ある課題に基づいた家をつくります。

これは、高瀬川横の元立誠小学校の会場を借りて、子どもたちの夏休みに2日間くらいをかけて精霊流しの灯籠をつくろうという活動です。できあがった作品はこうして実際に展示しました。まちを歩いている人が何やってるんだろうとのぞいてくださると、自分の作品を見てもらえるので子どもたちは非常に喜びます。建築家が20～30名、子どもたち20名くらい、学生にも入ってもらって一緒につくりました。

建築家というと、一般にはどんなことをやってるのかよくわからない。そこで、こうして市民の方々と、また子どもたちと一緒にものづくりをするなかで理解していくだこうという活動です。これは子どものつくった作品です。撮影は高松伸事務所の所長さんでしたが、彼は写真もうまいんです。グラフィックデザインとしてはどうでしょうか。こちらは小学校5年生くらいの子どもの作品。



です。今度は都市計画を子どもたちと一緒にやろうということで、いま活動を始めています。

このあいだ桂川が氾濫したときは、われわれはすぐに駆けつけて、京都市とともに防災に対して安心安全というシステムに則って現地訪問する、というのもわれわれの活動です。超高層ビルもあれば五重塔もある京都、このまちをちょっと考えてみよう、ということも子どもたちと一緒にやっております。

今日は私ども建築家の組織の説明ではなく、活動紹介のつもりで資料を準備しましたので、組織に関する説明が十分でなく申し訳ありませんでした。われわれの団体は現在こんな活動を行っています、というご紹介とさせていただきます。



会員による作品展

一般社団法人 日本デザイン文化協会京都  
理事長 平岡隆一



ここにちは、一般社団法人日本デザイン文化協会京都理事長の平岡です。略してNDK京都といっておられます。先ほどから場違いな感じで、お尻がモゾモゾしています。私どもの会は、どちらかというと京都に根ざしたもの、和や伝統というのとはちょっと違いますので、早く帰らないといけないかと思っていますが（笑）。

私どもの団体は1959年に設立されました。設立時はファッションデザイナーの集団として発足しましたが、59年というとまだ既製服もなく、オーダーメードが盛



年1回開催されるファッショショナー テーマ「はんなり・色・遊」

と発展させようとのシンプルなコンセプトで設立されたのがNDKです。全国に11支部があり、現理事長は森英恵です。去年、社団法人の見直しということになり、われわれはどうなるかと思っていましたが、その結果「NDK京都」として独立したわけです。

私どもの世界は京都といつてもなかなかむずかしくて、伝統や和をいかに採り入れるか、あるいはファッション文化としてどう採り入れるか、いつも苦心しているわけです。

いまの活動のメインは1年に1回開催するファッショショナーです。今年も11月に行いました。正会員とネクストという会員と、全国から応募してくる新人デザインコンテストから約300点が集まり、今年は33点が入選しました。最初は絵で応募してくるのでそれを審査し、その後実物審査を行います。今年は盛況で多くのお客さんに並んでいただきました。だいたい1000人程度の来場がありました。これが実物をつくった新人、今回は合計32点となりました。

これがNDK大賞を受賞した作品です。大賞受賞者にはパリ往復のチケットを差し上げます。今回は「未来をつくる」というテーマでしたが、作品とのイメージが合ったように思います。去年のテーマは「はんなり・色・遊」でした。

これがネクストの会員です。専門学校在学中に新人デザインコンテストで入選しても、卒業すると同時に会員とはさよなら、というのが従来でした。そこで、卒業し



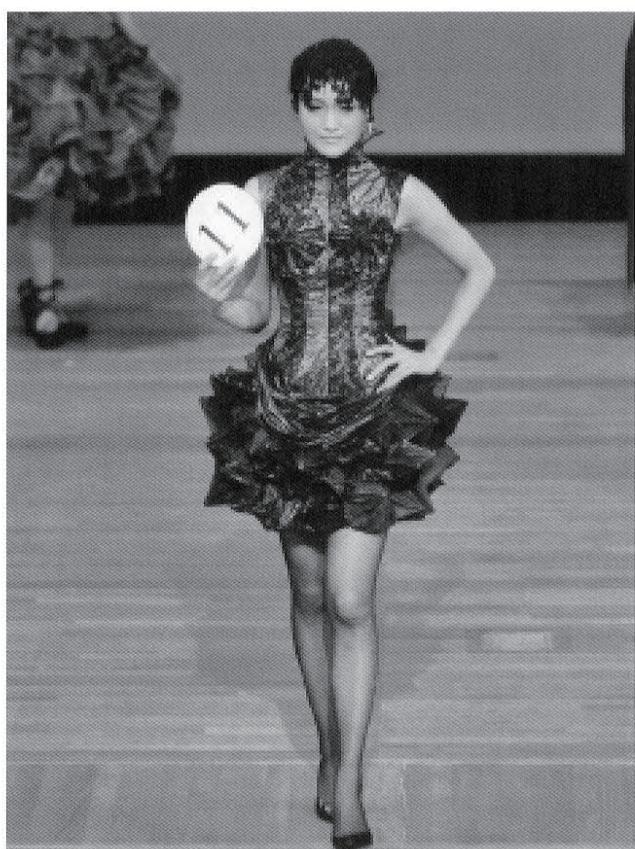
て社会に出た後にもう一度戻ってこいということで、いま10人程が戻ってきててくれています。そして次の世代を担うということでネクストという会員をつくりました。実力は相当備わっています。

去年から「男のきもの」というタイトルで、西陣青年団体と組んでアピールしようという活動を始めました。なかなか評判がよくて、この方は一般の方ですが、京都を訴えるのはぴったりかなと思います。男のきものはこれから面白くなるだろうと思います。

これは、とりあえず楽しいショーにしようということで、オガワ・ダンシングチームというグループとのコラボを行った様子です。男のきものあり、ダンスチームとのジョイントあり、という試みを行いました。スタッフが総勢百数十人というショーですが、今年も成功いたしました。

今後も、われわれは京都に根づいたNDKに育てていこうと思っています。もちろん西陣のきものを使って服をつくりたり、室町の商社とおつきあいを深めて組んでいくことも計画しています。また、最近は沈滞気味の染工場さんと組んで、面白いプリントをつくることも予定しています。われわれも京都に根づいた京都の9団体に恥じないような団体にならなければと思っています。

最後に、先ほどもアピールがありましたが、私どもも会員が不足しています。ぜひ会員になってください。普通会員から正会員までいろいろありますので、よろしく



NDK 大賞受賞作品



## ◎シンポジウム「京都力の活用に向けて」

大石 短い準備期間ながら、皆さんずいぶん資料を携えてきてくださいました。さっそく皆さんに登壇いただき「京都力の活用」というテーマで、このままの勢いで討論会を進めたいと思います。

いま7団体の皆さんのお話を聞きして一番気になったのは、実は私も京都デザイン協会の会員ですが、会員数が団体によってずいぶん違うんだということです。伝青（京都伝統産業青年会）さんが370名、JAGDA（日本グラフィックデザイナー協会）が京都で66名、京都建築設計監理協会さんは何名くらいでしょうか？

川下 私どもは会社単位で入る団体ですから、現在40社弱です。バブル期の半分に減っています。ほとんどは経済的理由です。倒産した会社もいくつかあります。建設不況のなかでいまは厳しい状況ですので。

大石 京都建築設計監理協会は企業会員のみということでしょうか？

川下 私どもはもともとJIA（日本建築家協会）の会員がつくった団体です。個人単位の団体とは別に、会社単位の団体が必要ということでつくった経緯があります。

大石 京都国際工芸センターの会員数は？ また推移としてはいかがでしょう。

黒竹 私どもは68名です。やはり減りましたね。工芸関係のマーケットがしぼんでいったことと、経済的理由やいろいろなことでかなり会員が減りました。

ただ、ここ1年くらいで復活の傾向もあります。私どもは正会員が入会金2万円、年会費6万円ですが、会員を増やすために準会員の制度を設け、入会金2千円、年会費1万円としました。相当リーズナブルですので、皆さんにも入っていただけたらと思います。

高倉三条下ルという好立地にスペースがありますので、会員さんはそこを活用できます。ついでで申し訳ないですが、本日は当会場ネロパッソをご利用いただきありがとうございます（笑）。ここは私どもの施設でございまして、200インチのスクリーンなどを全部無料で使っていただけます。諸団体の皆さん、京都でフォーラムや会合をするときにはぜひご利用いただきたい、コマ



コーディネーター：大石義一／京都デザイン協会 副理事長



黒竹節人/ 京都国際工芸センター代表  
ーシャルを含めてお願いします。

大石 京都デザイン協会の方はいかがでしょうか？

奈良 京都デザイン協会は正会員38名、賛助会員25名、学生会員2名です。7代目の理事長として先輩たちに申し訳ないのですが、隆盛していた時代に比べ、右肩下がりの状態です。ご存じの方も多いでしょうが、今西慧さんというパーソナリティがおられた頃は200名超の会員を誇ったこともあります。今後はもっともっとおつきあいの広さ、人と人の関係を増やしていきたいと思っております。



奈良磐雄/ 京都デザイン協会 理事長

大石 京都伝統産業青年会は370名という立派な規模ですし、JAGDA（日本グラフィックデザイナー協会）も京都だけで66名、JIA（日本建築家協会）も100名近いということですが、NDK（日本デザイン文化協会京都）はいかがですか？

平岡 多いときは120名くらいの会員がいましたが、今はその10分の1とまではいきませんが少なくなりました。

た。私どもも古い団体ですので、歳をとった人がやめていくと同時に、若い人が入ってこないというのが現状です。そこでその対策として、次の世代を担うという願いを込めてネクストという会員をつくりました。それが12～13人、トータルで現在30名くらいです。

大石 伝青（京都伝統産業青年会）さんは必ずしも減っていないと思われますが…。

勝山 いえ減っています。

大石 会員数の減少は、経済的原因が最大の原因の一つだとは思います。と同時に、つながりや関係が弱くなっていることもあると思います。つまり、若い人たちを団体に入れる入れないということよりも、それぞれの団体で、「京都力」として潜んでいたる若い人たちとどんなふうにつながり、交流していくべきか、今日はそこに絞ってお話しいただきたいと思います。

JIA（日本建築家協会）は子ども教育をテーマにしておられます。それは建築というむずかしいジャンルをわかりやすく置きかえ理解していただこうということだと思います。あるいは、NDK（日本デザイン文化協会京都）のネクスト会員の場合は、具体的にコンテストをしながら若い人をピックアップしていくという目的だろうと思います。

パネラーの皆さんには、若い世代にどう対応すればいいのかということも含め、ここからは討論ですのでご意見をいただきたいと思います。



勝山龍一/ 京都伝統産業青年会 会長

## 若い世代はなぜ入会しないのか

平岡 私たちも苦労しています。若い人に向かうと、会に入りたくないという人が多いんです。会に入ると締

めつけられる、団体のセオリーや規約に基づいた活動をしなければいけない、それだったら一人でやります、あるいは2、3人でやります、という結論になってしまいます。団体でしばるというのが、若い人には時代的に合っていない。そのへんをどうするかが大きなポイントだと思います。私たちはネクスト会員をつくって何とかやってはいますが、問題はいろいろあります。



平岡隆一/ 日本デザイン文化協会京都 理事長

大石 國吉さん、JIAは会員が増えているような雰囲気ですが。

國吉 おかげさまで、京都では減ることなく微増という状況です。しかし全国的にはこの20年くらいで、7~8千人から5千人くらいに減っています。会員数は東京圏が圧倒的で2、3千人いますけれども、関西に千人いたのが700人くらいになっています。

若い方にはこういう団体に所属するという気風が、もうなくなっているわけです。僕が顕著に感じるのは世代



國吉公一/ 日本建築家協会近畿支部 京都地域会 会長的な違いです。40歳代の方は誘えば何とか入ってくる。35歳以下の方は、建築の生産システムのなかでの設計の役割が変わってきているということもあって、非常に近場でのグルーピングが得意です。ただし、大きな組織

に所属することに対しては、バリアを設ける。それはいまの日本全体の特徴ではないかと思います。

35歳以下のひとたちはいい子たちが多いです。ただ、きわどいところになると、デジタル的に作業を削除する。グラフィックもそうだと思いますが、コンピュータで数字を駆使してデザインするという時代ですから、それをそのまま日常生活のなかにも移入する。私も建築デザインを教えているときに何度も経験しましたが、行き詰まると簡単に退却して、“ねばり強く”ということが見られません。

今日お聞きしたいと思うのは、建築は技術・学問とデザインの両方が求められますが、グラフィックは発想が柔軟で豊かな方であれば、どんどん伸びていけるのでは。建築の場合は技術習得に10年かかるといわれますが、分野の違いによって、若い方の力の伸ばし方が何かあれば、逆に教えてほしいと思います。

藤原（裕） グラフィックだからというのはとくに感じませんが、先ほどの会員数から見ますと、グラフィックデザイン自体がまだワンクールの終わり目くらいなのかなと思います。例えばJAGDA（日本グラフィックデザイナー協会）ができて37年、設立当初からの会員がまだまだ元気でがんばっておられます。そういう世代を見て入った、ちょうどわれわれがそうですが、学生のとき「グラフィックデザインってちょっとカッコいいよね」と思った世代です。でも、いま学校で教育していると、そういう空気感があまりない。デジタルの時代がそうさせたのではないかと思っています。

だからこそ、われわれがカッコいいかどうかは別として、次につなげていくことをしないといけないと思います。



藤原裕三/ 日本グラフィックデザイナー協会 京都地区 代表幹事  
京都でそれを志向するなら、そこに京都の魅力をみつけていかなければいけないというのが今日のテーマかと感じています。

**大石** 京都の生活・風習・習慣などはアナログ的だと思うのですが、グラフィックデザインはコンピュータの力を借りれば一気にできてしまう時代になってませんかね。

**藤原（裕）** それはできてしまうでしょう。というより、できたような気になれる。

**大石** ツールが変わってきたことによって、制作態度や人間像まで変わってしまったのではないか。國吉さん、いかがでしょう？

**國吉** 建築のディテールをつくるのも他人の盗用が可能になったから、細かいところまで手を動かして試行錯誤しながら描くということをしなくとも、作例を引っぱってきて安易にやっている。そうすると、いろんなところでぶつかりあって、これでは空間に収まらないじゃないか、といった時にキレるんですね。三次元の設計ではそういうことがよくありますが、二次元の世界ではどうでしょう。

**藤原（裕）** あまりそれは感じてはいないんですけどね。

**大石** 川下さん、いかがですか？

**川下** 若い人への対策として、われわれ設計監理協会の成り立ちをいいますと、40年前に建築家が今では考えられないような汚職をしたことがあります。当時の建設省は、いわゆる匿名が多いから汚職が起こる、だから設計料の入札で設計者を決める、こう言い出したわけ



川下晃正/ 京都建築設計監理協会 会長

です。われわれは、そんなバカなことはない。設計という技術、場合によっては芸術的な作業を、設計料の入札で金額を決めるとはけしからんということで日本建築家協会の会員による全国的な運動が起り、設計監連合会



パネラーの皆さん

をつくったわけです。当時はものすごい運動になりました。

ところが残念なことに、東京のある高名な建築家が裏切った。皆が社団法人格を求めていた時代でしたから、建築家協会には社団法人をやる、そのかわり設計監理協会は解散せよとの条件で、それをのんだ。結果、盛り上がっていた運動は瓦解し、設計料の入札制度が始まりました。

ただ京都や兵庫などの一部では、入札制度反対の運動は今も引き続きやっています。ただ建設不況下では、ほとんど半額で入札するのが現実で、私の事務所は以来役所の仕事はゼロ、金額的にとうてい取れません。そんななかで協会としては、役所・民間を問わず正しい設計者の選び方をしてくれということで、コンペ形式の要望をし続けています。京都府は最近かなり理解していただき、京都府立総合資料館、府立鴨沂高校建て替え、いずれもコンペで設計者が決まりました。

とはいって、コンペの一番の問題は役所の実績主義です。ある一定の実績がないと参加すらできません。私の事務所の規模は結構大きい部類ですが、役所の仕事に実績がないためにコンペに参加できない。そんなバカなことはありません。若い人がコンペに参加する機会が持てない。



パネラーの皆さん



その条件をはずすことが若い人を発掘することにつながるのです。

現実的には、私どもも会員は減っています。経済的な条件からです。若い人を誘うと、入っても何のメリットもないという。入札というとんでもない制度をなくすため、そして正しい設計者の選び方を確立するために運動しているのだと伝えて、それで「入ります」とはならないのが現状です。

われわれは若い人にいかに活躍の場を与えるかという取り組みをしています。京都府ではコンペで設計を決める例が少しずつ出てきました。総合資料館の設計では、ついに誰でも参加できるコンペになりました。にもかかわらず情けない話ですが、京都で私の事務所以外に参加したのは3社しかいない。ただ鳴沂高校設計ではやはり条件があり、われわれは参加できませんでした。



大石 黒竹さんところの京都国際工芸センターは、ずいぶんいろいろな活動をしておられます。それでも若者や新しい会員がなかなか入らない。僕から見れば魅力的な団体ですが、何が足りないとお考えでしょうか。

黒竹 京都国際工芸センターも30年です。設立当初は、こういう会に入るといろいろな情報が得られる、友人もつくれて気易く情報交換できるなど、得るものが多くありました。しかし最近はスマホなどを含めて情報

ツールが多様になり、自分の得たい情報はすぐにネットで入手できる。他と関わりを持たなくともまったく苦労しないという状況が、団体に若い人が入ってこないこの大きな理由ではないかと思います。

ところが若い人は入ってこないけど、最近は高齢の方が入ってくれます。そういう方はすごいノウハウ、技術、ネットワークをお持ちです。しかもほとんどボランティアで活動していただけます。われわれ世代はまだまだアナログ的なものに価値を見出すのかなと感じています。最近は、伝統的な作法や決まり事を若い人に教えなくな



黒竹節人/京都国際工芸センター代表  
っています。金封を例に挙げれば、差し上げる目的によって水引の結び方は違うのに、そういうことが一切わかっていない。そこで先ほどの団体紹介でもご紹介しました通り、私どもでは「日本検定」という検定制度をつくりました。これには3、4年かかりましたが、テキストもできて徐々に事業を進めています。例えば、ある銀行にこの検定を採用いただきました。若い行員がそういう知識を身につけておくと、得意先に行って「あんた若いのに古いことよう知ってるな」と信頼され可愛がってもらえます。ですから、そういう日本のしきたりを知識として身につける機会を、大学では社会人になる前に学生に提供してほしいし、大手企業も入社時に採用してほしい、という両方向から事業を始めています。

あるIT関係の大手企業は、工学関係の成績のいい人から採用します。ところが入社して半年でダメになる。技術的な能力は高くても、人とコミュニケーションする能力がなければ、組織のなかで人と関わる、あるいはその人が会社の組織を理解して仕事をするということに非常にストレスを感じる。これが今の若い人の状況ではないかと思います。

## 京都力と若者力のリンクを考える

大石 私は「京都力」というテーマにおいて、「京都力」は「若者力」とどこかでリンクしないかと思っていたのですが、いまのお話のように、高齢者も元気だぞということも一つの「京都力」であると考えることができそうです。

勝山さん、京都伝統産業青年会のなかでの世代間の実情と、また伝統産業では父親のあとを継ぐというケースは多いと思いますが、うまくいくケースもあれば、そうでない場合もあるのではないかと思いますが。



勝山龍一/京都伝統産業青年会会長

勝山 僕は西陣帯地青年会という団体にも所属しています。いま会員は18名です。30年前の25周年の年には200名の会員がおりました。帯地青年会の上部団体である西陣織工業組合では、いま2900番まで会員番号を発行しています。機屋さんがそれだけあったという計算ですが、ざっと考えても廃業された機屋さんが1000社はあると思います。そのうち帯地青年会として活動しているのは18名、もう100分の1にまで減っています。後継ぎが青年会に入ってこないという話ですが、やはり経済状況が大きいと思います。それに、やっている意味がない、そんなことをしているヒマがない、仕事が忙しい、時間があっても他のことに時間を費やしたほうがいい、そう思っている方が多い。



京都伝統産業青年会展



ここにいらっしゃる方はどこかの会に所属され活動されてきて、会のよさを知っていると思います。僕も会長をさせていただいて、会のよさも理解できますし、やってよかったという思いは残っています。しかし、そこが見えてない方はたくさんおられますし、見えないから魅力がないと決めつけている人が多いのではないかと思います。見える部分しか見ていない。その裏側の見えない部分のよさを感じられる人をどう育てるか。若い人たちにそのイメージをわかりやすく発信する、発信側と若い人のキャッチボールができるないような感じがしています。そこを変えないと、ちょっと仕方ないのかなと思います。

大石 よく似た現象が京都デザイン協会でも起こっているように思います。奈良さん、いかがでしょうか？

奈良 どうすれば若い人を引き込めるか。具体的にはまだ人数は少ないですが、学生会員を増やそうと取り組んでいます。学生のうちにいろんなジャンルのプロのデザイナーと接することができるし、わからないことはレクチャーしてもらえる、そういう受け入れ体制はできます。

ただそのPRといいますか、実際に接する場面、引き込む場面が不足していると感じています。私はかつて大学で情報デザインを教えていました、その頃は学生にイベントの手伝いや展覧会などに出品させたりと、一緒にやっていくことで接する機会が多かったのです。学生と社会的活動をつなぐことをもっと頑張らなければと思います。受け入れる協会側の気持ちは100%ありますし、京都には5つの芸術系・ものづくり系大学があるので、これを活かさない手はありません。「京都力」として将来につなげるには、われわれがもっと現場の先生と接する努力が必要ですし、学生たちに社会活動への参加体験をさせることが必要だと思います。

京都デザイン協会もいろいろなイベントをやっています。教壇に立っておられる先生は、運営を含めてさまざまな経験ができるということを学生に伝え、一人でも二人でも引き込んでいただき、学生にはその経験を就職などに活かせるキャリアとして蓄積してもらえるようにしたいと考えています。

**黒竹** 京都の人は「京都力」というものをとくに認識していないと思います。「京都力」という言葉を発して影響が及ぶのは、東京とかの他府県の方々です。京都の魅力を感じる人もいれば、実際に来て体験する人もいる。あるいは想像でいいと思っておられる人もいる。これはどう活用するかということが重要だろうと思います。京都にはさまざまな技術、建築、工芸から食文化まであるわけですから、これを京都の魅力として総合的に発信する。ところが建築などは図面があれば復元できますが、伝統芸能では、芸妓さん舞妓さんは、技芸で継承しなければいけないものもたくさんあります。これは時間のかることです。こういうものをどう維持管理し伝承するかということは大きな課題です。



お茶屋さんが立ち並ぶ花街ー上七軒

和食も無形文化遺産になりましたから、京都の魅力を京都の人たち守ってくださいよ、と応援する「京都ひとつくち旦那」の募集をいま考えています。伝統的な日本の美的根源が京都にある、あるいは心の安らぎが得られる、京都へ行けばいいものがある、と本当に思っていただけるのであれば、それらを資金面で支えるかつての旦那衆のような存在が必要です。上七軒という花街が、西陣の旦那衆によって育てられたことと同じです。日本の京都がその魅力をきちんと外へ向かって表現することによって、京好みの旦那衆、それは女性も含めてですが、「ひとつくち旦那」という受け入れ体制がつくれるのではないかと思います。その場合は、ここに参加された団体にも協力いただいて、表現力を魅力的に高めながら活動をしていければどうかと思っています。

**大石** それはまったくそうだと思います。ただ「京都力」とは何かと考えますと、京都1200年の伝統文化を細々ながら、ジャンルによっては途絶えがちになりながらも、人々の生活のなかにつながっていると僕は思っています。

しかし一方では、京都の歴史のなかには革新性の強いものがいっぱいありました。明治になって日本で最初に水力発電所ができたとか、近代化の先駆けとなった歴史もありますし、70年代の学生運動も京都がパワーをもった時代がありました。つまり、何かを伝承していくエネルギーと、それを打ち砕き破壊とまではいかなくても革新していくというエネルギーが「京都力」ではないかと思うところがあります。藤原さん、いかがでしょうか？

**藤原（裕）** そういうことが許される環境にあるということだと思います。学生運動もそうかもしれません、そのベースにはそういう学生たちが多くいたという条件にプラスする何かが「京都力」といわれるものではないかと思います。今回もこのテーマを事前にいただきながら、それが何かと言えないところが、実は活用できない一番の問題なんだろうと思います。それが今みたいにプラスアルファの追い風と認識すれば、それはそれで使えるのですが、それを勝手に何か自分にないもの、それに乗っかれば何とかなると思うと、活用のしようがないのではないか。僕もよくわかってないのですが。

大石さんがおっしゃったことは、確かにあります。「京都力」というと何となく伝統文化みたいなものに思いを馳せがちですが、それはわれわれがつくったものではないので、それだけに乗っかっていたら、まだ勢いがあるので乗っかれてはいるけれど、いざ使うとなれば、それは違う使い方をしていかなきゃいけないのだと思います。

## 伝統だけが京都力ではない

**大石** いま二極をお話したのは、若者像はどちらかというと革新に近いのではないか。口うるさい親父みたいに同じことを延々とやっているような日常にあきあきしていて、もっと違うものをつくりたい、もっと違う活動をしたいという思いがあって、その思いとわれわれ団体はどこかに共通点があるにもかかわらず、現状はどこか齟齬が生じているような気がしています。

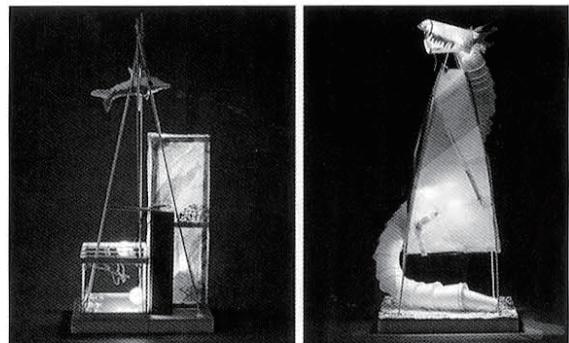
それが情報化社会における現象なのか、どうもこの話は20年前も30年前もあったような気もして、単に不

況だからこうなのかもしれないのですが。「京都力」をどう活用するかということは、実はいい意味での振り幅の広いエネルギーをわれわれ団体は受けとめなければいけない。黒竹さんがおっしゃるような、日本あるいは京都の伝統的なものをもう一度復活しながら、そのなかで若者たちにその意味や中身を指導しながら、デザインというジャンルのなかで共有していくものがあるのではないか。それは僕の最終目標で、そうなればいいなとは思うのですが、そうなっていくためには反対に、若い人たちのぶつ壊したいというエネルギーを受けとめられる団体になっているかどうかが問われるわけで、問題はわれわれにあるんだというふうに僕はとらえたいんです。無理があるでしょうか？　國吉さんどうぞ。

國吉 黒竹さんがいわれたように、海外や東京に行くと「京都力」をいわれます。私も田園調布へ行って設計すると、必ず京都から来ていただいてといわれます。建築の場合は日本建築が和の文化であり、そういうものに適合して歴史的にやってきたのが伝統工法ですが、それが現代の建築と相容れないものが多く、われわれは伝統工法と違う分野でやらざるを得ない。

和食はいまは日の出の勢いで、昇っていくときに需要があると思うんですね。ところが建築では和の需要がないから、作り手がなくなつて和がすたれていく。建築での「京都力」といえば、皆さん数寄屋建築とか木造建築を想像されると思います。大石さんがいわれた蹴上の発電所などを例にするまでもなく、京都の方は時代の先端を求める、あるいは現代のムーブメントの先端をとらえる方が京都に多い。それが「京都力」の本当のパワーなのかもしれない。ただ、それがいまはなかなか見えないので、皆さん右往左往している。

京都伝統産業青年会さんに教えてほしいのは、和をつくる職人さんがほとんど60歳代で終わって、40歳代の方が少なくなっている。日本建築でも作り手がだんだんなくなつてきているのですが、そこらへんは京都の産業的にいかがでしょう？　職人さんはずっと健在でしょうか。



勝山 僕らの帶地でいえば、職人さんは織り手さんのほか数十軒という分業制なので、一つひとつを見ると少なくはなっていますが、残っているところは残っています。ただ、それは日本でも1社2社という可能性はありますし、とくに道具を作る方はゼロになりかけている業者もありますので、危機的な状況ではあります。

國吉 需要はあるんですか？



西陣織の作業

勝山 伝統産業品は長く使えるので、長く使えるイコールこわれにくいですね。こわれたら買い替えるというのが一般的な発想ですが、長く使えるために需要があまりないというのが現状です。バブルの時期は2000社ほどがガシャガシャやっていたので、たくさん織れば消耗が激しくてこわれて買い替える、そういう早いサイクルだったものが、いまは減反というかたちで少なく生産することで、西陣関係としてはいまは需要はないに等しいですね。

大石 だからこそ、団体はそれをどうするかということで、設計監理協会の川下さんのお話のように、ある種の労働者運動かもしれませんけれども、危機があることによって一つの力に団結でき、ある方向を主張することができ、同時にそれに向かって共鳴してくれる若者がいればなおいいといえます。

国際工芸センターも、すごく新しい運動をなさっていると思います。「京都検定」はありますが、「日本検定」というのは日本人としての作法に意味があって、検定というかたちではあっても、そこにはいろんな思想・哲学も含まれ、人間像を構築していくうえでの重要な内容が含まれているということも想定できます。

N D K も若い人たちへの登龍門となる新人コンテスト

を続けておられ、それをネクスト会員として継続的に団体とつなげていくというのも一つの作戦ですし、京都デザイン協会も京都デザイン賞という賞をつくることで、社会へ発信し、つながりを持とうとしておられる。

京都でやっていくなかでいかに若い世代の人たちに、団体活動の醍醐味を伝達していくのかはむずかしいところだと思います。今日の「京都力」を一つのテーマにしながら、それぞれの団体の活動を理解しながら、具体的にどうしていくのかということを、機会あればたっぷり時間をかけてやっていきたいと思います。つまり京都のなかで活動していることを、府民の皆さんに知っていたくようなことを、一団体だけでなく、各団体が協調しながら伝達する事を考えたいと思います。

今日はもう少しゆっくりお話ししようと思っていたのですが、この話は早々に結論が出るようなテーマでもありません。「京都力」というものをどう認識しどう共有し、それをもってわれわれが協働できるものがあるやなしや。京都のなかで活動する者同士、どこかで手を携えることができたらなど。そしてできれば今後とも連絡会議のようなものをつくって、代表の皆さんとミーティングしながら、この京都デザイン会議の行く末をも含めて検討していくける京都デザイン関連団体協議会にしたいと思いますので、ご賛同いただくようお願いします。

本日は時間配分がうまくできなくて大変失礼しました。

ありがとうございました。



藤原（司会）ここまで3時間みっちり、皆さんにおつきあいいただきました。第34回京都デザイン会議、定刻より5分を超過しましたけれども、これにて基調講演およびシンポジウムを終了し、定刻通り次のプログラムであります交流会を始めさせていただきます。ありがとうございました。

## 交流懇親会



公益社団法人 京都デザイン協会 機関誌

DIALOGUE 2014

第34回 京都デザイン会議

発行 京都デザイン関連団体協議会

発行日 平成26年3月 31日

議長 三輪 泰司

副議長 奈良 磐雄

実行委員長 才門 俊文

実行委員 大石 義一

川口 凱正

藤原 義明

大野 好之

山岡 敏和

鈴木 秀信

会議記録 黒田 正子/ 株式会社ワード

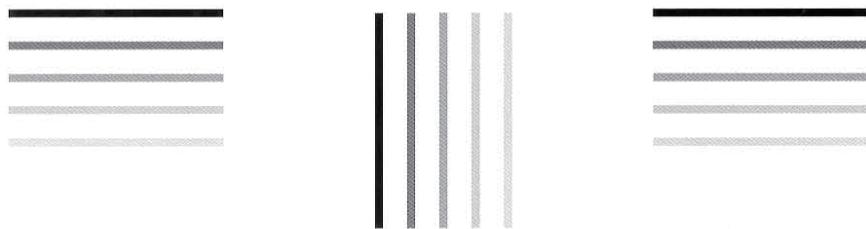
事務局 公益社団法人 京都デザイン協会

〒604-8247

京都市中京区塩屋町39（三条通小川北西角）

TEL050-3385-8008/050-3385-8009

## DIALOGUE 2014



### 第34回 京都デザイン会議

- 日時 / 平成 26 年 1 月 29 日 (水) PM 水 3:30~6:30
- 会場 / ネロパッソ
- 主催 / 京都デザイン関連団体協議会  
公益社団法人 京都デザイン協会
- 後援 / 京都府